
幸せな嘘

椎馬有紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せな嘘

【コード】

N4990E

【作者名】

椎馬有紗

【あらすじ】

嘘をつくことは、いけないことですか？

「星が綺麗だね」

弟は微笑んで言った。

私は決まってこう言う。

「本当ね」

「花がいい香りだね」

弟は微笑んで言った。

私は決まってこう言う。

「本当ね」

「空が澄んでいるね」

弟は微笑んで言った。

私は決まってこう言う。

「本当ね」

「風が涼しいね」

弟は微笑んで言った。

私は決まってこう言う。

「本当だね」

あるはずなど、なかった。

青白い頬。

紫色の腕。

力無い体。

綺麗な星など、どこにもありはしない。

無機質な蛍光灯のみ。

いい香りの花など、どこにもありはしない。

殺菌された匂いのみ。

澄んだ空など、どこにもありはしない。

白い天井のみ。

涼しい風など、ありはしない。

閉めきられた窓のみ。

「お姉ちゃん、ほら、蝶がやってきたよ」

光さえ捕らえない目は固く閉じられている。動かない腕は、指先だけが微かに動いている。

「捕まえた。見て見て」

弟の表情は、なんの感情も表していなかった。口がぱくぱくと、奇妙な人形のように上下するだけだった。

「本当ね」

私は言う。

弟は目を覚まさない。

ある日、私と弟はこっそり出掛けた。閉じ込めるのは、あまりにも可哀想だから。まだ自由だった頃の遊び場、河原へ行った。

私は握っていた手を離れた。弟は駆けて行った。私は追いかけたりなど、しなかった。

手元に残ったのは、空っぽのガラス瓶。

雨が降り始めた、真冬の空は濁っていた。

とうとう、弟は何も見ることが出来なかった。

私の嘘さえ見抜けず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990e/>

幸せな嘘

2011年1月27日13時07分発行